季節風

情報広報部副部長　藤　井　美　穂

Free hugs

街頭で「Free hugs」と書かれたボードを持って立ち、見知らぬ人とhugし合う、こんな風景を見たことがありますか？東京渋谷あたりの広場にこのボードを持って何人かの若者が立っているらしい。抱き合うだけで、長く話をするわけでもない、終わればまたそれぞれ自分の道。しかし実際hugした人は「あたたかい気持ちになる」というのです。なぜ「Free hugs」のボードなのか？と聞くと、1日中コンピューターの画面を相手に仕事をしていると、人の温もりが欲しくなるといいます。そりゃそうでしょう。でもなぜ「温もり求む」の看板に寄ってきた、見知らぬ人とのその場限りのコミュニケーションを求めるのでしょう。それ以上お互いの気持ちに踏み込まれたくないから、hugでグッバイ。人との関係においても自分の欲しい時だけ、責任が発生しない条件で自分が欲しいものだけ得たらそれでオーケー。それとも、hug運動は「周りの人はコワクない、温もり合おう」の社会メッセージ？いずれにしてもあまりに現代的な像に思えるのです。

ちょっと古くなりますが、育児ゲームの「タマゴッチ」、ペットロボット「アイボ」などを思い出します。あくまでvirtualなpetは実際にはおしっこもうんちもしない、ごはんを忘れたらgame over、スイッチを入れたら可愛い動き。便利なペットでしたが、すぐ忘れ去られました。15年前、大学の動物実験室からわが家にヒマラヤン種のオス猫が引っ越してきました。長毛種の彼は和猫とは大脳野が異なるようで、実験動物としては役にたたず処分されることになっていました。しかし彼は愛嬌があり、動物実験室の狭いケージの中という過酷な環境においても、人がそばに来るとお腹を上に向け甘えるそのしぐさがあまりに可愛らしく、係の方が里親探しに苦労していました。1カ月が経ちましたが里親は現れず、結局マウス部屋にちょくちょく通っていた私が引き取ることになりました。家人が朝仕事に出かけ夜遅く帰って来るまで彼は一人で食事し留守番していますから、久しぶりに家人が帰宅すると玄関まで迎え出て犬のようにフサフサと尻尾を振り、すり寄って来たものでした。しかし自分達の生活に追われ、彼の気持ちに耳を貸さなくなった私と夫に対し、彼の目に冷ややかな色が宿ったことを今でもはっきり覚えています。アイボから見放されたとしてもこんな悲しい気持ちになることはないでしょう。

メディアは総裁選一色ですが、安倍晋三首相の退陣にはどんな力と彼の意志が動いていたのでしょう。戦後生まれ初めての総裁が「美しい国」造りをメッセージに誕生しました。私達と同世代の、これまでの政界においては比較的若い人材が、総裁として建て直しを期待されました。彼の「美しい国」とは何をイメージしたものだったのでしょう。戦後、私達は意志があれば手に入るわが国の発展の中、拒絶されることなく生きてきましたが、世界の現実を相手にVirtualな理論は通せるはずがありませんでした。「Free hugs」のボードが、安倍総理の疲れ切った表情と重なって見えたのです。

臨床医は今日も、次から次と病院を訪れる患者さんと向き合って時間が流れていきます。身体症状の裏に時折重い人生をのぞかせながら、患者さんは身体を預けてきます。そこにはひとかけらの虚像もありません。手術ロボットを駆使したとしても、手術対象は現実の疾患であり、人生を背負っている患者さんです。グッバイは許されないこの仕事を選んだ重さを再確認し、連休明けの火曜の朝、感謝しながら仕事着に手を通しました。

北海道医報　ＩＳＳＮ 0913-0217　2007.10.1. 第1069号
発行人　北海道医師会長　長　瀬　清
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西６丁目
TEL (011)231-1432　FAX (011)221-5070　頒価１部250円
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp